広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第59号　2010　97－103

中学校歴史教科書における「元寇」記述についての比較研究

包　黎明

（2010年10月７日受理）

Comparison Research on “Gennkou” Description in Junior High School History Textbook

Bao Liming

Abstract: Junior high school history textbooks in Japan “Gennkou” was examined to compare with traditional textbooks for each existing textbook publisher that you have written what. The textbook is the second time “gennkou” civilian had been deployed to active behind the hostile relations between the governments of the time have been written at some length about the (Travel Zen and trade), I want to take even more about.

Key words: Gennkou, history textbook, international understanding
キーワード：元寇，歴史教科書，国際理解

１．はじめに

前近代日本の歴史上で，唯一，他民族の大規模な侵攻を受けたのは「元寇」である。「元寇」とは，1274年と1281年の２回にわたってモンゴル民族が建国した元が襲ってきた文永の役，弘安の役のことである。チンギスハンがモンゴル帝国を築き，その孫の，フビライハンは，1271年，中華帝国風に元という国名を採用し，1279年，中国の南宋を滅ぼし，中国全土を支配した。フビライは高麗などを従属させ，日本にも服従を要求して使者を送ってきたが，当時の日本で実質的に国家権力を握っていたのは鎌倉幕府＝武家政権であり，幕府の執権の北条時宗は元の服従要求を無視した。そこでフビライは日本遠征を企て二度にわたって大軍で攻め寄せたのであった。

本稿では，日本の中学校の歴史教科書に，「元寇」もしくは「蒙古襲来」がどのように描かれているかを，各出版社の現行教科書と従来の教科書の内容を比較して検討してみたい。日本では教科書検定制度があるから，内容にそれほど大きな差がないけど，それでも出版社によって教科書の記述が微妙に違っており，そこから受け取る印象も違うし，学習指導要領の改訂によって時代によって内容も変遷している。

日本の教科書の歴史は，検定制実施以前期1872（明治５年）～1885（明治18年），検定教科書期1886（明治19年）～1902（明治35年），国定教科書期1903（明治36年）～1945（昭和20年），文部省検定教科書期1946（昭和21年）～1948（昭和23年），現行検定教科書期1949年（昭和24年）～というように制度が変わってきた[1)]。

そこで本稿ではまず，現在使われている８つの出版社の中学校教科書の「元寇」記述内容を比較検討し，次に各時代の教科書の記述内容の変遷を，国定教科書期については『日本教科書大系』収録の縮小復刻版（尋常）小学校教科書を，戦後から現行教科書までについては一番多く採用されている東京書籍版中学校教科書を使って比較検討してみたい。

本論に入る前に，現行「中学校学習指導要領」の記述について引用しておこう。社会科の歴史的分野の「内容」については次のように書かれている。

> 歴史的事象に対する関心を高め，我が国の歴史の大きな流れを，世界の歴史を背景に，各時代の特色を踏まえて理解させ，それを通して我が国の伝統と

文化の特色を広い視野に立って考えさせるとともに，我が国の歴史に対する愛情を深め，国民としての自覚を育てる。

歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させ，我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせるとともに，他民族の文化，生活などに関心をもたせ，国際協調の精神を養う。

また，「内容の取扱い」の箇所には，

東アジアの国際関係については，元寇（げんこう），日明（にちみん）貿易，琉球（りゅうきゅう）の国際的な役割などを取り扱うようにすること。と書いてある[2)]。

なお，筆者は中国内モンゴル自治区出身の中国人であり，出身民族はモンゴル族であることを申し述べておきたい。本稿は客観的な分析に努めているつもりであるが，外国人・中国人・モンゴル族である私の視点が，日本人を対象とする歴史教育の教科書の分析に，一定の作用を及ぼしていると考えるからである。

第一章　現行歴史教科書の元寇についての論述

今手元にある出版社８社の現行教科書は，2005年（平成17年）検定済みの教科書である。出版社は検定制度の制約もあり，各社の記述内容にそれほど大きな差はない。

まず各教科書に共通する元寇の記述を，本文・写真・挿絵等について整理し，比較してみることにする。本文の内容はほとんどモンゴル帝国の発足・拡大と元寇という二つの項目から成り立っている。

(1) 本文内容の比較

８つの出版社は全部モンゴル帝国とその拡大について紹介し，それから元の建国についても触れている。

モンゴル帝国はユーラシア大陸に跨った国家で，モンゴル帝国のユーラシア支配によって貿易や文化の交流が促進されたことは従来から強調されてきたが，近年では人類が初めて歴史的地域・文化圏を越えた「一つのとき」の共有を経験し，全体像でとらえることができる「世界史」が文字通り初めて展開したことを積極的に評価するようになっている[3)]。東京書籍版と大阪書籍版は貿易や文化の交流について記述している

表１

出版社	タイトル	東西交流	文永の役	弘安の役	日本武士の戦い	図・挿絵	三回目の計画
東京書籍	東アジアとのかかわりと社会変動	○	対馬・壱岐をへて北九州の博多湾に上陸，集団戦法や優れた火器により，日本軍を悩ました末，引き上げ	1281年に再び攻めてきたが御家人の活躍，海岸に築かれた石塁の防備で，上陸できないまま，暴風雨で大損害を受け退く	御家人の活躍	蒙古襲来絵詞 フビライハン モンゴル帝国の拡大	○
大阪書籍	元の襲来と鎌倉幕府のおとろえ	○	約3万数千の軍，対馬・壱岐を経て博多湾に上陸，元軍は引き上げる	約14万の大軍で再び九州北部に攻めよせる，石築地を利用，上陸できないまま簿風雨に被害を受けて退いた	幕府軍は元軍の集団戦法や火薬に苦戦しながら激しく戦い	元軍と戦う武士 元寇 石築地あと 元寇の恩賞を求める武士	○
教育出版	おしよせる元軍	×	対馬・壱岐を襲い 九州沿岸に上陸 元軍が引き上げる	上陸できないうちに暴風雨による損害で退却	火器を武器とする元軍と幕府軍の間で激しい戦い	元軍と戦う日本の武士 元軍の進路 モンゴル帝国の広がり	○
日本文教	東アジアとのかかわり	×	1274年と1281年の2度にわたり蒙古が日本を襲ってきた。服属を拒んだ日本に大軍を送ってきた。武士は元軍の集団戦法や火薬を使った武器に苦しめられた。元軍の兵士の多くは征服された宋や高麗の人々で，士気が高まらず，団結もできなかった。暴風のため大損害を受けて引き上げた。		武士は元軍の集団戦法や火薬を使った兵器に苦しめられた	元軍との戦い モンゴル帝国の広がり モンゴルの襲来 博多湾岸に残る石	×
帝国書院	海をこえてせめてきた元軍	×	九州北部に押し寄せ，博多湾に上陸 暴風雨もあって直ぐに引き上げる	九州北部を襲う 上陸できないうちに激しい暴風雨に壊滅的な打撃を受け引き上げ	幕府軍は苦戦 幕府軍の抵抗	元軍と戦う武士モンゴル帝国の領域 元寇防塁跡	×
清水書院	元軍と鎌倉幕府の滅亡	×	対馬などを経て北九州に攻めよせる 暴風雨に襲われて引き上げた	高麗軍や宋の軍を率いて北九州に押し寄せた。暴風雨で引き上げた	集団戦法や火器に苦しめられ	元軍の戦い方 元寇 恩賞を要求する武士 石塁の前を進む季	○
扶桑社	元寇	×	2回にわたって大船団を仕立てて日本を襲った。日本側は略奪と暴行の被害を受け，新奇な兵器にも悩まされた。 2回とも「神風」と呼ばれる暴風雨に襲われ敗退した。		鎌倉武士はこれを国難として受け止めよく戦った。	13世紀後半の世界 フビライハン 元軍の進路 モンゴル軍と戦う御家人現在に残る石塁	×
日本書籍	元が襲来する	×	高麗軍を率いて約3万の軍隊で北九州に押し寄せ博多湾から上陸，集団戦法や火薬を用いた攻撃に苦しんだ。しかし，夜に突然の暴風雨が元軍の船を襲ったため，引き上げ	朝鮮と中国本土から14万の大軍で，しかし寄せ集めの軍隊でまとまりがなく，石塁の完成もあって，上陸できないまま大暴風雨で打撃を受けてひきあげ	幕府は執権北条時宗の指導のもとに迎え撃った	モンゴル帝国 フビライハン 弘安の役 石塁 元軍襲来の経路図	○

が，他の教科書には書かれていない。学習指導要領にも「歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させ，我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせるとともに，他民族の文化，生活などに関心をもたせ，国際協調の精神を養う」と書いてあるのであるから，モンゴル帝国が世界史上に果たした積極的な役割について，すべての教科書で扱ってほしい。

文永の役と弘安の役については，出版社によって記述量は違うが全部の教科書で触れている。この中で東京書籍だけは「元寇」という呼び方を括弧の中で書き，他の出版社は全部「この二回の元軍の襲来を『元寇』と呼ぶ」と説明している。杉山正明氏は「『元寇』という語は不自然であり，日本人以外の人には通じない，江戸時期になって使われ始め，幕末から明治にいたって定着する，此の和製漢語は大陸発の「倭寇」を意識して創りだされた日本発の“対抗語”である」[3] と論じている。たしかに「元寇」の表現がどのように成立したのか，杉山氏の提言の通りなのか，検証する必要がある。その再検証を経た上で，「元寇」の語が江戸時代に成立した和製漢語であるなら[4]，「元寇」を歴史的用語として使用することの是非についても再検討する必要があるだろうし，教科書で「元寇」の語を使うにしても，脚注かコラムでこの語の形成過程，流布過程について言及すべきであろう。しかし「寇」は，元来，侵攻・侵略を指す語であり[5]（杉山氏の言うような「どろぼう，強盗，こそどろ」をさす言葉ではない。侵攻主体が元なのであるから，「元寇」という表記は，「倭寇」と同様に歴史用語として認めていいのではないかと考える。

文永の役（第一次日本遠征）について，一般的にはつぎのように理解されている。すなわち，元は，対馬，壱岐の両国を占領し，そのあと博多湾岸に上陸し，日本側は迎え撃ち激戦が広げられる。集団戦法と火薬を使った兵器を駆使する元軍の前に，幕府に動員された御家人ら武士たちはたまらず敗退する。夜，海上の船に引き上げた元軍は夜半の暴風雨によって多くの被害を出して高麗に撤退した，と。この世間に流布している俗説を東京・大阪・教育出版社以外はそのままに使っている。

実際に日本側と中国側の史書を検討すると，元軍の引き上げ理由について，『元史』には「冬十月，入其国，敗之。而官軍不整，又矢尽，惟虜掠四境而帰。」[6] と書いている。すなわち，元軍は日本国内に侵入し日本軍を撃ち破ったが，元軍の内部対立（「不整」はその結果であろう）と矢を使い果たしたことから，周辺の地域を略奪して撤退した，というのであり，内部対立が発生し矢が払底するほどの予想外の激しい抵抗を受け苦戦を強いられたことは想像されるが，暴風の記述はない。日本側の「八幡愚童訓」にも元軍の戦法，幕府軍の果敢な抵抗，異国降伏祈願については詳述しているが嵐のことは一行も触れておらず，朝になると蒙古船が全部いなくなっていたと書いてある[7]。季節的に考えても元軍が引き上げた11月には台風があるかどうかに疑問が残る。文永の役における元軍の撤退は，元軍首脳と高麗軍首脳の作戦上の対立と幕府軍の果敢な抵抗によるもので，暴風雨はなかったというのが今日の日本の学界では通説であると思われ，高麗の抵抗運動とも絡めて，モンゴル帝国の異民族支配が果たした交流と結合という側面とは別の，抑圧と抵抗というもう一つの側面にも光を当てながら，少なくとも学界の通説の水準で記述するべきである。暴風雨について触れない東京・大阪・教育出版社版は，学界の通説を尊重しているといえるだろう。

また最近の研究のなかには，1274年の第一次日本遠征（文永の役）における元の戦争目的は，①日本の南宋後援を阻止すること，②南宋政府が最終段階に日本に避難することを阻止すること，であったとするものもある[8]。南宋が日本に亡命政府を樹立することへの危惧というのはともかく，元がなぜ日本遠征を企てたのかという問題は，服従要求拒絶への懲罰，という表面的な理由を越えて検討しなければならない課題であると考える。

第二次日本遠征（弘安の役）ではモンゴル軍，高麗軍と降伏後の南宋を編成し合わせて十万の軍を二路に分けて出発させた。しかし，第一次日本遠征（文永の役）後，日本側の石塁などの防禦策が強化され，それに二路の軍勢の合流が遅れるなど元軍の作戦は計画通りに行かなく，八月に，博多湾内外を埋め尽くした元軍艦船はほとんど戦うこともなく，暴風雨（台風）で一夜のうちに壊滅し，そのため多くの溺死者を出し，わずかに残った艦船は撤退した。これについての各出版社の記述はさほど違いがなく，弘安の役における勝利（第二次日本遠征の失敗）の要因を暴風雨によるものとしている。

また三回目の遠征が計画で終わったことの理由については，たいていの教科書では南宋人・ベトナム人の抵抗とフビライの死去を挙げており，元寇を通して，「我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせる」という指導要領の目標にせまる記述になっている。しかし，日本文教・帝国書院・扶桑社版がこの点に触れていないのは残念である。

各教科書は，日本が最終的に元軍を撃退できた原因として，第一に暴風雨をあげ，第二に鎌倉幕府の指導の

もとで御家人たちが結束して防衛体制を構築し（石塁），果敢に戦ったことをあげ，元軍側の内部的弱さとしては各民族（モンゴル，高麗，宋）の寄せ集めの軍隊で統率できない，海にわたっての戦いに慣れていなかったことをあげている。

ここで，歴史を客観的過程として科学的に扱おうとする「歴史学」と，「我が国の歴史に対する愛情を深め，国民としての自覚を育てる」という学習指導要領が求める「歴史教育」との間に横たわる難問に直面することになる。暴風雨と御家人たちの奮戦を，客観的過程として描くことも可能であるし，神秘的な力に守られている特別な国であることを意識させ，御家人たちの国防意識を美化して語ることも可能である。教科書の元寇記述の二つの傾向も，立脚点を「歴史学」に置く立場と歴史を教化手段とする「歴史教育」の立場の違いの表れであろう。あえて強調しなくても，客観的過程として叙述するだけで，普通の感受性の持ち主なら，元に占領されなかったことに安堵し，御家人たちが奮戦したことにエールを送り，「我が国の歴史に対する愛情を深める」であろう。意図的な強調は，過度なナショナリズムの温床になるのではないだろうか。

この二回の襲来の影響として，各出版社の教科書が挙げているのは鎌倉幕府の衰えである。元軍の襲来に備えて鎌倉幕府の動員に応じた武士たちは，多くの費用を使い，命がけで戦ったが，恩賞の領地をもらうことができず，しだいに幕府に対して不満をもつようになった。鎌倉幕府の基盤である「御恩」「奉公」の関係が崩壊して，同時に悪党と言われる者と一緒になる武士も現れ，その活動が活発になり北条氏の失政に対する御家人たちの反感が強まり，天皇を中心とした政治の復活に意欲的だった後醍醐天皇が，有力御家人や悪党などを味方につけ，鎌倉幕府打倒の運動へと繋がっていく。この点については全部の教科書は詳しく書いている。ここではどの教科書も，歴史を客観的な過程として描く「歴史学」の視点が貫かれていて，「歴史的な見方考え方」を身につけることができる構成になっている。

またこの二度にわたる蒙古の襲来の思想面に与えた影響も大きく，「神国」観念を醸成した。元が日本を襲った時，各神社や寺院において神仏に祈祷したために神風が起こり日本を救った，日本は神に保護されている国という見方である。この「神国」観念自体は奈良時代以前に遡るものであるが，元寇を契機に増幅され，日本のナショナリズムの源流の一つになっていく。第二次世界大戦末期，ファナティックな「神国」意識が鼓吹され，その極限形態が自爆攻撃「カミカゼ」であった。神国，神風について帝国書院や扶桑社が触れている。「神国」意識を歴史事実あるいは日本人の歴史意識として客観的に記述することは，なぜそのような意識を持つようになったのかという歴史的探究心を喚起する上でも意味あることであるが，「神国」観を美化するようではいけないと思う。

二回の日本遠征（元寇）後の両国間の敵対状況の下であっても，商人による民間の貿易活動と僧侶による文化交流はほかの時代に比べて劣るものではなく，盛んに行われていた。各出版社版の中では帝国書院だけ，「歴史に挑戦！沈没船の謎を推理してみよう！－新安沖で見つかった沈没船－」というコラムがあって，鎌倉時代終わりごろ，多くの貿易船が幕府の許可を得て日本と中国の間を往来していたことを書いてある。このような内容を通して，生徒たちは国際関係の複雑さや国際交流についての理解がもっと深くなると思う。他の出版社も触れてほしい。

第二章　国定教科書期の尋常小学校教科書と戦後中学校教科書の元寇についての記述

日本では1872（明治５）年に「学制」が発布され，1886（明治19）年４月に近代学校制度が確立された。そのあと初等教育では，1904（明治37）年から国定教科書がはじまり，戦後，1947（昭和22）年まで使用されていた。その間の教科書は全部で七期に分けられ，第一期は『小学日本歴史』，第二期『尋常小学日本歴史』，第三期『尋常小学国史』，第四期『尋常小学国史』，第五期『小学国史』，第六期『初等科国史』，第七期『くにのあゆみ』となる[9]。

本章では，戦前期については尋常小学校国定歴史教科書が縮小復刻版で載っている『日本教科書大系』を使い，戦後については一番多く使われている東京書籍版の中学校歴史教科書を使って，元寇についての記述を時期を追って比較してみることにする。

１．国定教科書期

戦前の歴史教育は「忠君愛国」の精神を育成することが最大の目標とされ，歴史事実はその目標の達成のための素材であった。元寇は「忠君愛国」の精神を育成するうえで最も重要な事項であった。まずはタイトルの変化を見ると第二期までは「元寇」という事件名であったが第三期から第五期までは北条時宗という人物名になり，当時の人物を通して歴史を理解させるという方針に沿っている。第六期になると，悪化する戦局とも関連して「神風」となり，従来の人物主義的な傾向が無くなる。

二回の戦いについての記述の量は，時期と共にしだ

表2

時期	タイトル	文永の役	弘安の役 石　　墨 武士の勇敢な戦い	大風 神風	亀山上皇の 祈り
第一期 1904年 (明治37年)	元寇	×	○ × ×	○ ×	○
第二期 1910年 (明治43年)	元寇	わが将士勇敢にこれを防ぎ，元軍は目的に達せずに遁れ帰る	○ × 奮戦する	○ ×	○
第二期改訂版 1911年 (明治44年)	元寇	同上	○ ○ よく戦いこれを撃退	○ ×	○
第三期 1921年 (大正10年)	北条時宗	敵軍遂に逃去りたり	○ ○ 石墨により防ぐ敵艦を襲う	○ ×	○
第四期 1934年 (昭和9年)	北条時宗	元の軍はとうとう逃去る	○ ○ 石墨に立てこもり防ぐ，敵艦へ斬り込む	○ ○	○
第五期 1940年 (昭和15年)	北条時宗	同上	同上	○ ○	○
第六期 1943年 (昭和18年)	神風	波風が起こる 敵は命からがら逃げていく	○ ○ 石墨によって一歩も敵を上陸させません 敵艦を襲って火を放すなど	○ ○	○
第七期 1946年 (昭和21年)	蒙古の来襲	敵が上陸してきたため，大そうなんぎをした，ところが大風が起こって	○ ×	○ ×	×

いに多くなり，特に太平洋戦争の戦局が悪化してきた第六期には武士の戦いぶりを国民の国防意識を高揚させるために詳細に記述し，文永の役にも暴風が起きたという記述があたらしく加えられ，「日本は神国である」という意識を強調している。第六期までの戦前・戦中期の国定教科書にはすべて亀山上皇の敵国調伏の祈りを書いている。北条時宗の決断と御家人の活躍が前面に出される記述のなかで，天皇の祈りが神に通じて神風が吹いて元軍が壊滅したというエピソードを加えることによって天皇と神風をつなげ，天皇への忠誠心を喚起する構成にしている。

敗戦後，GHQ の指令によって天皇制国家主義・軍国主義の解体と民主化がすすめられるなか，教科書についても GHQ は超国家主義・軍国主義的な記述や記紀神話を排除するよう指令があり，また歴史学者・教育関係者の間に神話的・独善的な皇国史観に立脚した歴史教育が日本を誤った方向に導いたとの反省的な機運が高まるなかで，第七期の国定教科書『くにのあゆみ』がつくられ，記述内容は一変した。『くにのあゆみ』の方針は，客観的・合理的な内容のものとし，従来の神話・天皇や忠臣を中心とした歴史記述を改めて人民を主とした歴史記述とする方針になった。したがって蒙古襲来についても客観的な記述につとめ，量も少なくなっている。二回とも暴風で元軍が敗退したという記述で，武士の活躍についての記述はない。武士の記述がないことは不自然さを否めないが，武士道を軍国主義と結びつける風潮のなか，何らかの政治的指示があったのか執筆者が過剰に自粛したのか，いずれかであろう。

2．戦後から現在までの教科書内容の比較（東京書籍）

戦後の検定制度のもとでの教科書は中学校歴史教科書の東京書籍版を使った。記述内容に変化が見られる教科書を中心として分析した。

戦後の教科書の初めのころは両役の元軍の人数が書

表3

時期	タイトル	元の世界交流	文永の役	弘安の役 大風	図	三回目の計画	武士(御家人)の活躍
1953年検定 (昭和28年)	蒙古との戦	×	4万の大軍	14万の大軍 暴風大きな損害を受けて退いた 2回とも暴風	13世紀の蒙古の勢力図 文永の役	×	×
1954年検定 (昭和29年)	蒙古との戦	×	4万の大軍	14万の大軍 暴風大きな損害を受けて退いた 2回とも暴風	文永の役	×	朝廷や幕府を始め武士たちはよくこの国難に当たった
1961年検定 (昭和36年)	鎌倉幕府のおとろえ	○	わが軍は苦戦に陥った	上陸を許さなかった 2回とも暴風	元の領土 北条時宗と元軍の進路	×	御家人，御家人でないものも力を合わせて働いた，民族の自覚が高まった
1977年検定 (昭和52年)	元寇と鎌倉幕府の衰え	○	火器を持ち，集団戦法で日本側は苦戦	上陸を許さなかった 2回とも暴風	蒙古帝国 元との戦い	×	御家人，貴族や寺社の武士も戦った。 国家に対する自覚が高まり，日本は神や仏の守る国という思想
1980年検定 (昭和55年) 1983年改訂検定	モンゴルの襲来	○	火器を持ち，集団戦法で日本側は苦戦	石塁 準備があって上陸させなかった 2回とも暴風	モンゴル帝国 ヨーロッパを攻めるモンゴル軍 石塁，蒙古塚	○	御家人ばかりではなく貴族や寺社などに従っていた武士も戦った。
1992年検定 (平成4年)	モンゴルの襲来と室町幕府の成立	○	集団戦法優れた火器で日本軍を悩まし引き上げ	石塁等の準備，元軍が上陸できないまま暴風のため ＊弘安の役に暴風雨	モンゴル帝国の広がり モンゴル軍との戦い モンゴル軍の船	○	特になし
2005年検定	モンゴルの襲来と室町幕府の成立	○	集団戦法優れた火器で日本軍を悩まし引き上げ	御家人の活躍，石塁の防備で元軍は上陸できないまま 同上	モンゴル軍との戦い モンゴル帝国の拡大	○	御家人の活躍

かれており，二回とも「暴風で退いた」と書いてあったのが，1961年検定版には弘安の役には「元軍の上陸を許さなかった」という言葉を使う。また元を紹介する時には東西の交流が書かれるようになった。1980年検定版には元の三回目の計画が書かれ，元の拡大の背景にある東アジアに目を向け始めている。1992年検定の教科書から文永の役の暴風についての記述が無くなり，また1992年検定版に限って日本武士の戦いの様子を書いた内容が消えている。また弘安の役については「元軍が上陸できないまま暴風のため引き上げる」と記述の言葉が変わっている。表には入れてないが1996（平成８）年検定の教科書には注があって「元寇以後，日本と元の国交は絶えていたが交流は活発で寺社の造営のために北条氏は貿易船を出していた」と書いてある。ほかの年の検定教科書にはこの内容が書かれてない。2005年になると日本側が元軍を撃退した原因として御家人の活躍が復活するが文字数が少ない。

全体的にみると戦後すぐの教科書には記述量が少なかったが，次第に蒙古や元についての紹介の量も多くなり，文永の役や弘安の役についての記述にも東アジアの背景を書くことを通して世界史的視点から日本史を見るように工夫されていると思われる。

おわりに

戦前期小学校国定教科書，戦後中学校歴史教科書の元寇についての記述内容の変遷についてまとめてみよう。

国定教科書時期では第６期までは執権北条時宗を救国の英雄として描き，御家人たちの犠牲的防戦を賛美し，暴風雨を亀山天皇の祈りが天に通じた神風ととらえ，忠君愛国の精神を育成する物語として描いている。太平洋戦争の戦局が悪化しつつある第６期の教科書はその傾向は最高度に達している。

敗戦後の第７期『くにのあゆみ』は，GHQ の皇国史観・神話教育排除の指令，歴史学者・教育関係者の内省と学問の自由への希求が高まるなかで，科学的・民主主義的に歴史をとらえようとする清新な姿勢に溢れており，元寇についても国家主義的記述が一掃されている。

戦後の歴史教科書の内容においてはモンゴル帝国と世界交流について次第に詳しく記述するようになり，

モンゴルの日本襲来については日本の事情だけに限定されていた視野が，東アジア世界全体の動きのなかでとらえるように広がっている。また80年代以後の教科書では蒙古襲来のとき，日本将士たちの戦い様子を詳しく書かなくなっているが，それは「国際協調の精神を養う」という指導要領の理念と関係していると思われる。しかし指導要領が掲げる「歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させ，我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせるとともに，他民族の文化，生活などに関心をもたせ，国際協調の精神を養う。」という目標を深めるためには，政府間の敵対関係の背後で活発に展開されていた民間の交流(貿易や禅僧の渡航)についてもっと取り上げてほしいし，ユーラシア大陸に跨るモンゴル帝国を野蛮視する伝統的ヨーロッパ中心史観から脱却して，モンゴルのユーラシア統一が世界史に果たした積極的役割にもっと目を向けてほしい。

【注】

1）松島榮一『歴史教育の歴史と社会科』青木書店，2003年
2）『中学校学習指導要領』文部省ホームページ
3）杉山正明『モンゴル時代のアフロ・ユーラシアと日本』吉川弘文館，2003年
4）以前は日清日露戦争ごろからではないかという議論もあったが，18世紀『大日本史』で使われているのが早い例であることが確認されている
5）『日本国語大辞典』
6）(明)宋濂『元史・日本伝』中華書局出版社，1976年
7）桜井徳太郎，萩原龍夫，宮田登校注『寺社縁起・八幡愚童訓(甲)』岩波書店，1975年，187ページ「廿一日朝海面ヲ見遣ルニ。蒙古船無ニ一艘，皆々馳帰ケリ。見之。コハ何事」と書いてある
8）杉山正明『モンゴル時代のアフロ・ユーラシアと日本』吉川弘文館，2003年，136ページ
9）海後宗臣『歴史教育の歴史』東京大学出版，1969年

【参考文献】

海後宗臣［ほか］編『日本教科書大系』歴史近代編 講談社，pp.1962-1963
吉田悟郎『歴史認識と世界史の論理』勁草書房，1970年
石田法太「元の日本遠征を扱って，教室から」『自国史と世界史』未来社，1991年
石渡延男「大国元はなぜ小国日本に敗れたのか」『一〇〇問一〇〇答・日本の歴史』河出書房新社，1998年
中村一良「『初等科国史上下』の編纂趣旨」(日本放送協会編『国民学校五六年教科書編纂趣旨と取扱ひ方』日本放送出版協会，1944年)

(主任指導教員　下向井龍彦)